

グローバルな人の移動と交流

—日本からの帰還バングラデシュ人の実態調査—

立教大学社会学研究科プロジェクト研究A

2015年度報告書



グローバルな人の移動と交流

—日本からの帰還バングラデシュ人の実態調査—

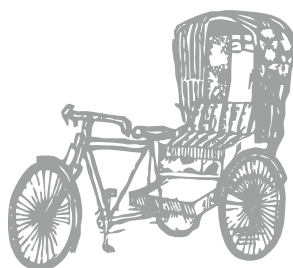
立教大学社会学研究科プロジェクト研究A

2015年度報告書

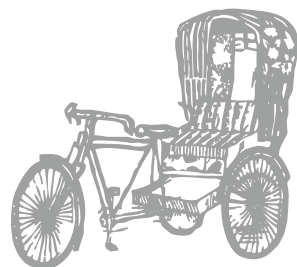


目 次

第1章 帰還バングラデシュ人の研究	7
第1節 バングラデシュと日本間の人の移動	
―帰還したバングラデシュ人の生活―	7
第2節 大学と外国人住民支援団体との連携による移民政策の提言に向けて	
―国際的な人の移動と交流／日本とバングラデシュの事例に参加して―	14
第2章 インタビュー調査	17
第1節 H氏	17
第2節 K氏	35
第3節 KR氏	53
第3章 フィールドワーク覚え書き	63
第1節 バングラデシュでの調査を終えて	63
第2節 バングラデシュ旅行記	69
第3節 「不法滞在外国人」というイメージについて	
―元非正規滞在外国人労働者のインタビュー調査から―	77
第4節 雑感：バングラデシュ調査旅行に参加して	81
資料	83
資料1 2015年度バングラデシュ調査チーム	83
資料2 IOM Bangladesh 2014 リーフレット	84
資料3 調査への地元の反応	98
(1) 記者会見と配布資料	98
(2) 現地新聞記事	102
(3) 現地テレビニュースの報道	103
資料4 2015年 写真でつづる「プロジェクトA」	104



はじめに



本プロジェクト授業の目的は、グローバルな人の移動が進展するなかでエスニック・コミュニティがいかに変貌し、ホスト社会へ影響を与えるかなどを調べることである。それに関連して一定期間の外国滞在後に帰国した人々のトランスナショナルに展開するネットワーク形成のあり方についてもデータ収集している。本プロジェクトの授業および研究期間は当初の計画では2014年度から2016年度にかけての3年間で、各年度とも実地調査の実施そのものが授業内容になっている。調査に関しては外国人住民支援のNGO、“Asian People’s Friendship Society（以下 APFS）”と連携しており、大学教育とNGO連携の在り方に関するプロトタイプの提示、という目標もある。NGOによる情報提供だけでなく、大学側もNGOの外国人住民支援に関する研究上および実質的な貢献を目指している。

APFSは1987年12月に創設されて、これまで外国人住民の支援を行ってきた。とくに1980年代後半に数多く訪問したバングラデシュ出身者は主要なメンバーであった。近年は、フィリピン出身者が多くなっているが、バングラデシュとの絆を保持しており、前回と今回の調査でもそのトランスナショナルなネットワークが活用された。日本国内とダッカで聞き取り調査を実施してきた。日本社会とバングラデシュへの帰還者のトランスナショナルな絆、日本とバングラデシュの両国に関連する組織活動等については、社会的背景としての移住者を送出した国（バングラデシュ）の変化、日本とバングラデシュのかかわりの変化についても資料を整理している。

当初、授業としては定量的、定性的な調査のいずれも実践できるようなプログラムの設定を計画して、調査計画およびその実践、データ解析や報告書作成だけでなく、シンポジウムあるいは学会発表なども予定していた。2015年9月のバングラデシュでのフィールドワークの際には、現地での記者会見がテレビのニュースで取り上げられ、幅広く本プロジェクトを紹介する機会があった。また、この間にプロジェクト型授業担当者が、本授業と深くかわかる書籍『市民が提案するこれからの移民政策』（現代人文社）を上梓しただけでなく、次の出版企画も進行している。本年度は、バングラデシュ調査に関する公開講演会も開催した。

調査法としての実践に関する学習体系を十分に築けたかと考えると、まだその途上に過ぎない。大学教育とNGOの連携の在り方についても、モデルの提示までには至っていな

いかも知れない。しかし、ダッカやビクランプールにおける長時間のインタビュー等は、現時点では解析の途中段階だが、貴重なデータである。実践的な授業の展開やそれにとまなう研究成果だけでなく、何よりもバングラデシュでの体験そのものが大学院生だけでなく、教員として関わってきたわれわれにとって非常に意義深いものであった。現地で協力していただいた方々なくしては、調査のインタビューどころか現地での活動そのものが不可能であった。この場をお借りして、心からお礼申し上げたい。

水上 徹男